

氏名（本籍） ソウトメ チ エ 五月女 智 恵（千葉県）
 学位の種類 博士（音楽）
 学位記番号 博音第77号
 学位授与年月日 平成18年3月24日
 学位論文等題目 〈論文〉『フランコ・アルファーノの歌曲』
 -近代イタリア歌曲における音楽と詩の融合-

論文等審査委員

（総合主査）	東京芸術大学	教授	（音楽学部）	林 康 子
（演奏審査主査）	〃	〃	（ 〃 ）	林 康 子
（演奏副査）	〃	〃	（ 〃 ）	直 野 資
（ 〃 ）	〃	助教授	（ 〃 ）	大 角 欣 矢
（ 〃 ）	〃	非常勤講師	（ 〃 ）	高 丈 二
（論文審査主査）	〃	教授	（ 〃 ）	林 康 子
（論文副査）	〃	〃	（ 〃 ）	直 野 資
（ 〃 ）	〃	助教授	（ 〃 ）	大 角 欣 矢
（ 〃 ）	〃	非常勤講師	（ 〃 ）	高 丈 二

（論文内容の要旨）

本論文は、フランコ・アルファーノ（Franco Alfano, 1875-1954）の室内声楽曲（*lirica da camera*）における音楽と詩の融合について考察したものである。

論文の構成は、序文、本文3章、結びとし、さらに付録としてアルファーノの歌曲一覧表、歌曲作品の歌詞対訳を掲げた。

序文では、アルファーノの歌曲を研究するにあたり、彼の性格や内面を探り、詩人との関わり、歴史的背景、そして同時代の作曲家との交友関係など、アルファーノに関する多方面からの考察をふまえた上で、イタリア独自の歌曲の本質に迫ることなどを本論文の目的として述べた。またアルファーノについての従来の研究についても言及した。このうち、E. ソーズマン著『20世紀の音楽』、G. ポール著『現代音楽小史』、O. アンドレ著『現代音楽』などはいずれも一般的な音楽史的記述に留まっている。一方、天野秀廷著『現代イタリア音楽』やD. スティーヴンス編『歌曲の歴史』は、レスピーギ、カゼッラ、ピッツェッティ、マリビエーロなどの声楽作品の作曲経緯や楽曲分析などについて記述はされているが、アルファーノの業績については一切触れられていない。このように、近代イタリア歌曲の演奏が増えているにも関わらず、文献や資料の乏しい現状であることを指摘した。さらに、近代イタリア歌曲が「リーリカ」と呼ばれている歴史的背景について記した。

第1章では、アルファーノの生涯について、Rino Maione, *Franco Alfano: Presagio di tempi nuovi con finale controcorrente* (Milano, 1999)（リーノ・マイオーネ編集『フランコ・アルファーノ-最後の逆流に新しい時代の予感-』）に基づきながらまとめた。

第2章では、アルファーノの作品に焦点を絞り、以下の2節に分けて記述した。第1節では、詩人（フランコ・アルファーノが扱った歌詞）との関連性について述べ、特にアルファーノが好んだ詩人、タゴール（Rabindranath Tagore, 1861-1941）の生涯と人物像について述べた。アルファーノとの接点が多く、アルファーノの歌曲の本質を探る上において重要だからである。第2節では、年代の流れに沿いながら、アルファーノの室内声楽作品の創作状況を検証した。また歌とピアノのための歌曲作品から編曲された、声とオーケストラ、また声と諸楽器のための作品について略述した。

第3章では、アルファードの歌曲作品の演奏法と解釈について、タゴールの詩に作曲された5曲を例として取り上げて詳細に論じた。それぞれの曲について、まずアルファードの歌曲創造のインスピレーションのもととなった詩の分析をおこない、その上で詩の内容がどのように楽曲に反映されているか、そしてそれをどのように演奏していくべきかを論じた。その際、メロディー重視のロマン派の時代から詩の内容を最も重要とする時代へと移ったことを踏まえた上で、詩と音楽との関係を検証した。また、第2章、第1節の中で述べたタゴールとアルファードの接点という観点から、詩そのものがアルファードの創作意欲を掻き立てたことを明らかにした。

結びでは、各章の成果を要約した。彼の不屈の精神が、彼をドイツやフランス、ロシアなどさまざまな国へと赴かせ、研鑽を積み、深い知識を得ることを可能ならしめたのである。そのことが彼の音楽作品の創作において反映され、生涯で63曲にのぼる歌曲作品が生み出されることとなった。彼の歌曲作品の書き方は、あくまでも詩を第一に考え、詩も文学的に優れたものを選択し、特にタゴールの詩を好んだのである。そして演奏者に深く詩を理解することを求めた。なぜなら、彼の作品はメロディックに歌うというよりは、むしろ詩を朗唱しなければならない箇所が多く、詩をきちんと理解していなければ朗唱できないからだ。このように、アルファードの歌曲においては、音と言葉が不可分に結びつき、「音楽と詩の融合」の世界を成し遂げたということを論じて結論とした。